

高浜虚子と横光利一の船旅

— 『渡仏日記』と『歐洲紀行』 —

児島由理

総合教育非常勤講師

Keywords : Kyoshi Takahama, Riichi Yokomitsu, voyage, tourism, travel literature

In 1936 Kyoshi Takahama and Riichi Yokomitsu made a voyage from Japan to Europe on the same ship. After they landed at Marseilles, Kyoshi called on his son in Paris and traveled through Europe, while Yokomitsu went to see the 1936 Berlin Olympic Games after a stay in Paris and some travels through Europe. After their return to Japan, Kyoshi published *Tofutsu Nikki*, and Yokomitsu *Ôshû Kikô*. Though they had similar experience on board, their records of their voyages are quite different. The purpose of this paper is to compare these two works and to consider their difference and the common social background.

0. はじめに

1936（昭和 11）年 2 月 16 日に横浜を出港した日本郵船箱根丸に、偶然 2 人の著名な文学者が乗り合わせた。高浜虚子（1874～1959）と横光利一（1898～1947）である。

虚子はパリ音楽院に留学中の次男、池内友次郎（1906～1991）を訪ね、六女の章子（1919～1999）と共にマルセイユ経由で渡欧し、フランス、ベルギー、ドイツ、オランダ、イギリスを回り、各地で様々な風景や人々との出会いを句に詠んだ。そして同年 5 月 8 日、再びマルセイユ港から日本郵船管崎丸で帰途につき、6 月 15 日に横浜に帰港し、4 か月に及ぶ旅を終えたのであった。

一方の横光は、『東京日日新聞』及び『大阪毎日新聞』の特派員としてベルリン・オリンピック取材のための渡欧であった。虚子と同じ箱根丸に 2 月 20 日、神戸から乗船し、以後 3 月 27 日にマルセイユに到着するまで、日々の夕食を虚子と同席し、時には船中句会に参加し、寄港地観光も共に行うなどして過ごした。マルセイユで上陸した後は、フランス、イギリス、ドイツ、オーストリア、ハンガリー、イタリア、スイスと周遊し、7 月 24 日に目的の五輪取材のため、飛行機でベルリンへ移動し、8 月 11 日にベルリンを出発、シベリア鉄道経由で帰国の途についた。

昭和に入り、船でヨーロッパへ旅に出ることは、幕末・維新の時代に比べればさほど困難なことではなくなっていたが¹、それでもそれが実現できる人は限られていた。日本を代表する文学者2人が偶然同じ船で渡欧するはこびとなったことは、日本国内では大きなニュースとなり、船が横浜を出港した2月16日の『東京日日新聞』には、「横光、高浜の両氏 渡欧の道連れ 偶然・箱根丸に同船」²という見出しのもと、大きな記事が掲載されている。

そのような貴重な旅の記録を、2人とも帰国後に旅日記として出版している。高浜虚子は1936（昭和11）年8月、改造社より『渡仏日記』を発表、横光利一は1937（昭和12）年4月、創元社より『歐洲紀行』を刊行した。

神戸を出港してからマルセイユに到着するまで、2人は同じような風景を見て、同じような船中生活を送っていたはずである。しかし、両者の日記の記述から受ける読者の印象は全く異なるもので、同じような生活の中でも両者が感じたり考えたりしたことには大きな差異があったことがわかる。

本稿では、全く同じ船で同じ行程の旅を続けながら、全く違った様相を示しているこの2人の旅行記を、比較検討してみることにする。

1. 高浜虚子の渡欧

高浜虚子が渡欧するきっかけとなったのは、先述したように次男の友次郎がパリに留学していたということがあったが、もとより虚子はヨーロッパに特に興味があったわけでは全くなかった。海外体験は、1895（明治28）年と1911（明治44）年の2回、朝鮮半島に行ったことがあるだけであったが、その後、特に西洋世界を見てみたいと望むこともなかった。虚子自身は「兼々一度渡欧して見てはどうかといふ話は、素十君（引用者注：高野素十、1893～1976）が帰朝した時分からあったのであるが、さういふ事は容易に起りさうにない事と私自身も考へて、格別問題にしないであらう」³と述懐している。

その虚子が、「行くのならば行けぬことは無いやうな心持が、諸君の勧誘をきくにつけて、頭の中に起つて来て、其事が今迄とは違って確実性を帯びて来るやうな心持がだんだんして来て、終に行くことになってしまった」⁴のはなぜだろうか。

虚子の言う「諸君の勧誘」については、日本郵船の機関長として虚子の船旅に往復ともに同行し、俳人として虚子に私淑する上ノ畑純一（楠窓）が、帰路の寄港地シンガポールの日本人会で次のような話をしている。すなわち、「我が花鳥諷詠詩として最も重要な四季の変化に恵まるゝ事の少ない、常夏の国に住んで居られるにも屈せず」、熱心に俳句に精進しているシンガポール在住

¹ 開国以来、欧州航路が整備されて日本からヨーロッパへの渡航が徐々にスムーズなものになっていく過程は、拙稿「近代日本人の見たマルセイユ——「初めて踏む欧羅巴の土」に抱いた印象——」（『実践女子短期大学紀要』29、2008年）で概観したので、ここでは繰り返さない。

² 旧漢字は現代風に改めた。以下、引用は全て同様である。

³ 高浜虚子『渡仏日記』（改造社、1936年）、365頁。

⁴ 『渡仏日記』、365～366頁。

の日本人俳人たちの中から、「親しく先生の御来遊を乞ひ、熱帯地風物を御覧願うと共に、その作句上の特殊性について先生の御示教に預る事を得ば、如何に幸福であらうかと云ふ熱心な御希望」が上がっているのを耳にし、自分からも虚子に「折々其事を御願して来た」というのである。そして、「今回先生が御外遊を決行なさった諸動機の中に、皆さんの熱心なる御勧誘が一つの誘因を為して居る」と楠窓は述べている⁵。高野素十や上ノ畑楠窓らの熱心な勧めを受け、虚子は「それでは多くの諸君がもし行く方がいゝといふのならば行ってもいゝ、又多くの諸君が行かない方がいゝといふのならば行かない事にする」と他人ごとのように言って出発を決めたという⁶。

しかし、虚子自身が「不用意な旅」で「何の計画もない」、「全く漫遊」と表現してはいるものの⁷、何一つ目的のない旅というわけでもなかった。「今度の私の旅行は、歐洲の風物に接し度いのが主な目的であったのだが、また一つは、かういふ悩み（引用者注：春夏秋冬の区別の殆どない熱帯で俳句を詠む際に、季題をどのように扱ったらいいのかという悩み）を持ってゐる、この熱帯の俳人諸君のために、その解決を見出し度いのも一つの願ひであった」⁸という記述からは、楠窓が言うようにシンガポールの俳人たちの熱心な勧誘が旅の大きな動機になったことが窺えるが、それ以前に「歐洲の風物」に接することが虚子にとって第一の目的であったことがわかる。

この点については、出発直前の2月13日、東京中央放送局にて行われた「留別俳話」でもっと詳細に述べられている。それによると、「俳句は日本の国土が生んだ文芸である。我国は春夏秋冬四時の循環が最も正しく行はれる国であるところから、その四時の景色の変化を諷詠する特殊の文学の俳句といふものが生れて来たのである。これは西洋などでは発生しようにも発生することの出来なかつた文学でありまして、我国のやうな四時の風物にとんだ国でなければ起り得なかつた文芸で」あり、虚子は今まで西洋に行ったことがないけれども、常にそう信じてきたという。今回の旅では「歐洲の景色風物に接することが出来て、かねがね私の考へてをる、俳句は日本の島国が生んだ誇るべき存在であるといふことが事実にて証明されば結構だと思ひます。又そんなものでなく、風景時候の変化も日本以上のものが歐洲に存在してゐることが判れば、それも大變な学問だと思ひます。又いさぎよく今迄の所論を訂正します」というのである⁹。

つまり、虚子の渡欧は「歐洲の風物」に接することが目的であったとはいえ、単なる物見遊山の観光旅行ではなかつた。ヨーロッパにせよ道中で寄港するシンガポールなど熱帯の地域にせよ、異国の文化を吸収し学ぼうというスタンスではなく、自身の唱えた俳句の根本理念である「花鳥諷詠」を異国の地でも実践できるのか否かを見てきたいという、その一点に集約されていたといつてよい。

実際、虚子の旅行は、「客観写生」を旨とする彼の俳句理念そのままに、異国の自然や風俗をあるがままに見てきたにすぎない、極めて淡々としたものであつた。船中、絶えず無線電信を受け取り、それに対して返電したり、日本の新聞社へ書き送る原稿執筆にも追われていたため、日本の人々の動向に絶えず接して、次第に「船の上に在る事を忘れて居る間がだんだんと多くなつ

⁵ 『渡仏日記』、337～338頁。

⁶ 福田清人（編）前田登美（著）『高浜虚子 人と作品 13』（清水書院、1966年）、82頁。

⁷ 『渡仏日記』、497～498頁。

⁸ 『渡仏日記』、403頁。

⁹ 『渡仏日記』、495～497頁。

て来た」という。「船中の生活は、単調と云へば単調であったが、元来私の平常の生活が極まり切った行動を取って居るので、それが更に限局された生活になったところで、大して苦痛も感じなかった」「大概毎日の数時間は、自分の勤めとして居る事をこつこつやる事の方に寧ろ興味があった」といった記述からも、肩の力の抜けた、平常心に近い状態で過ごした旅であったことが窺える。

「自分は今船に乗って居るのではあるが、然し船に乗って居ると云ふ事よりも人生の旅を続けつゝあると云ふ感じの方が強かった。故国に帰って、横浜に第一歩を印したときも、それは故国に帰ったと云ふ事よりも、矢張り人生の旅を続けて、今こゝに横浜埠頭に立ったと云ふ感じの方が強かった」¹⁰という虚子にとって、この渡欧の旅は取り立てて格別な旅というわけではなく、人生という1つの大きな旅の中の一場面でしかなかったのであろう。

2. 横光利一の渡欧

他方、横光利一の旅の動機は全く異なるものであった。先述のように、『東京日日』『大阪毎日』の特派員として派遣されるという形ではあったが、実のところ、それに先立ってパリを根城にヨーロッパ文明を幅広く観察し、考察することが主目的であったという¹¹。横光のそれまでの海外渡航経験は、1928（昭和3）年、上海に約1か月滞在したことがあるのみであった。

1936（昭和11）年1月、『東京日日』『大阪毎日』の両新聞は横光の外遊の予告記事を大きく発表し、歓送会があちこちで行われたが、横光自身は全くこの渡欧に気乗りがしていなかった。中山義秀（1900～1969）に「僕は実は、外国へなぞ行きたくないのだ。しかし皆、行け行けと勧めろんでねい」と寂しそうに語ったり、送別会の後の銀座で「孤影悄然」としているところを中野重治（1902～1979）に目撃されたりしている¹²。何より横光本人が、『欧洲紀行』の中でも「私は自分で来たくて巴里へ来たのでは決してない。私の友人たちが、行け行け、行け行けと、たうとう押し出してしまったのだ」¹³と、出発前の心情を振り返っている。

それほど気が進まなかった理由の1つは、文壇の寵児が半年間、日本を離れることに恐れや不安を感じたということもあるかもしれないが¹⁴、それ以上に『文学界』1936（昭和11）年4月号に掲載された座談会「横光利一渡欧歓送会」が示唆的である。過去、多くの渡航者が帰国すると「国粹主義者か愛国主義者になってくる」ことを、横光は憂鬱に感じ、自分も渡欧によってそのような国粹主義的心情に従わざるをえなくなるのではないかという予感もして、旅行には気が進まなかった。しかし同時に、そのような心理的葛藤を作家として解明したいという好奇心が刺激され、それが渡欧を決意する引き金となったという可能性¹⁵は大いにありえるだろう。『欧洲紀行』

¹⁰ 『渡仏日記』、1～3頁。

¹¹ 大久保喬樹「現代史転換の証言者」（横光利一『欧洲紀行』、講談社文芸文庫、2006年所収）、275頁。

¹² 福田清人（編）荒井惇見（著）『横光利一 人と作品 28』（清水書院、1967年）、75～76頁。

¹³ 横光利一『欧洲紀行』（『定本 横光利一全集 第十三巻』、河出書房新社、1982年所収）、330頁。以下、『欧洲紀行』の引用は全集の頁を記す。

¹⁴ 中山義秀は『台上の月』の中でそのような推測しているという。『横光利一』、75頁。

¹⁵ 佐藤昭夫「横光利一の欧洲体験——「心理の推移」についての考察——」（『比較文化』16、1970年）、34～35頁。

の冒頭で、「これから出す手紙は保存しておいてほしい。その時、思った事を書きつけておくのは手紙に限る。(中略) 船中の心理の移動、自然の変化と自分の気持ちを後で引きくらべてみたいと思ふから」¹⁶と書いているように、彼の旅行記は自己の心理の観察に限定され、異国の文物を摂取しようという意識の希薄なものであった。パリに到着後もそのスタンスは変わらず、「私の通信は、巴里そのものを書くことが目的ではなく、私といふ一個の自然人が、この高級な都会の中へ抛り出され、形成されてゆく心理の推移を、偽りなく眺めるのが目的である」¹⁷という記述からもそれは明らかである。

そのような個人的な関心から出立を決意した欧州旅行であったが、それとは裏腹に、旅に公的な性格が付与されてきたことが、横光の気をますます重くしていったということも考えられる。出航直前の2月17日、日本ペン倶楽部主催の送別会が開かれているが、これはロンドン・ペン・クラブでの日本文学に関する講演依頼があったことを受けてのものであった。実際には講演は行われなかったが、横光はこの講演に備えて黒紋付きの羽織袴を用意してパリに持参したという。渡欧直前に横光に期待する声が高まる中、出発日には肩に力を入れざるを得ない心理状態へと追い込まれていったというのである¹⁸。

3. 箱根丸の旅程

2人の旅の日程は以下のようなものであった。

- 2月16日 横浜出航(虚子乗船)
- 2月17日 名古屋着
- 2月18日 大阪着、神戸着(20日出航、横光乗船)
- 2月21日 門司着
- 2月24日 上海着
- 2月28日 香港着
- 3月4日 シンガポール着
- 3月6日 ペナン着
- 3月10日 コロンボ着
- 3月17日 アデン着
- 3月21日 スエズ着、陸路カイロへ向かい1泊
- 3月22日 カイロより陸路ポートサイドへ向かい再び乗船、出航
- 3月27日 マルセイユ着(2人下船)

¹⁶ 『欧洲紀行』、290頁。

¹⁷ 『欧洲紀行』、368頁。

¹⁸ 中川成美「『欧洲紀行』論への試み—横光利一の巴里—」(『紀要 立教女学院短期大学』14、1982年)、122頁。

上海以降、全ての寄港地で2人は下船して現地を観光し、出航前に船に戻るという行動パターンであった。おそらく殆ど全ての乗客が同様の行動を取ったであろう。目的地へ向かう途中の各寄港地での観光も、船旅の魅力の1つであった。各寄港地には日本郵船の事務所や現地在住の日本人による観光業者が存在し、虚子や横光のような著名人でなくとも、現地の日本人に車を手配してもらい、案内のもと各名所を見て回るの、旅の大きな楽しみであった¹⁹。

また、スエズ運河を通過する際には、平均約15時間かかる通過時間を利用して、乗客の多くはスエズで下船し、砂漠の中を車で移動してカイロで1泊、ピラミッドやスフィンクス、博物館などを観光した後、車でポートサイドに出て、運河を通過しポートサイドに到着した船に乗って旅を続行するというオプションツアーが定番であった。虚子も横光もこの1泊旅行に参加している。

終日航海となる日には、乗客が退屈しないよう船内で多数の催し物が用意された。船員たちによる演劇やジャズバンド、船長主催のティーパーティー、すき焼きパーティーなどが催された。また、甲板でのデッキゴルフ、デッキチェアでの読書、社交室での乗客同士の交流など、船内には多数の娯楽が用意されていた。

このような旅程を書き記した2人の旅日記であるが、数多くの共通の体験をしているにも関わらず、その筆致は全く異なり、読者が受ける印象には大きな違いがある。以下、その点について詳細に見ていくことにする。

4. 高浜虚子の『渡仏日記』

高浜虚子の『渡仏日記』は、極めて詳細に日々の出来事が書き記されている。起床・就寝や食事の時刻、船から見た植物や鳥の観察、船内や寄港地で訪ねてきた人との会話の内容、船内で読んだ本、実に事細かである。寄港地で名所観光をした記述も、非常に詳細であり、どこをどのような順序で見物したのか、読者にも非常にわかりやすい。その土地の情報について、現地在住の日本人や船内の乗組員などから教わった事柄についても、併せて詳細に記している。当然のことながら、寄港地で観光を行った日の日記は自然と長くなり、終日船内で過ごした日の日記は相対的に短くなっている。

その記録から窺える船内での生活ぶりは、先に述べたとおり、普段と変わらぬ気持ちで気楽に過ごしたものであった。「鎌倉から東京へ毎日通ってゐるその延長のつもり」²⁰で旅に出て、「不断着のまゝで、普段著^(ママ)のまゝの心で一吋ヨーロッパを覗いて来た」と言うとおおり、終始和装で通した。日本人として和服を着るべきである、異国の服装は着たくない、と肩肘を張ってそれで通したわけではなく、「必要があれば洋服を著^(ママ)ても差支へないと思つてゐたのであるが、和服で一向差

¹⁹ 例えば金田俊郎(著)竹之内明子(編)『65年前の洋行―銀行マンが見た1937年の世界』(文芸社、2003年)は、虚子や横光からわずか1年後の1937(昭和12)年、1年間の海外研修(主にロンドン)に派遣された三和銀行の行員による船旅とヨーロッパ滞在の記録であるが、同様に各寄港地で現地の日本人の手配で名所見物を行っている様子が窺える。

²⁰ 『渡仏日記』、366頁。

支へがなく、格別不便を感じなかったのもそれで押通して来たといふまでである」という。堂々と和服で寄港地や到着後のヨーロッパ各地を歩いていると、現地の人々は物珍しそうに虚子の服装や草履を眺めたが、その視線には、軽蔑は感じられず、ただ珍しいものに出会ったという好奇の表情に受け取れた。虚子は彼らの反応を「自分の国、自分の都会、自分の流行があることを知って、他に如何なる国があるかを知らぬ者が多い」だけであると解釈している²¹。船内でも、香港からシンガポールへ向かう途中の3月3日、熱帯に近づき船員が夏服に着替え、客たちも薄着になってきたところで、虚子は浴衣に袴をはいて食事の席に着くようになった。虚子は、自身の服装を、脛や太腿を出して食堂に出席する西洋人より礼儀正しいと考え、「少くとも日本の船では、そのうち、西洋人達もだんだん日本人の真似をして、浴衣がけくらので食堂に出席するやうになることであらうと思ふ。さふいふことが、早晚必ず来るべきであると思ふ」と述べている²²。過度に西洋人を意識しているわけではないが、日本人として誇りを持って堂々と振る舞っていたことが窺える。

船内でも自宅と同様に読書をしたり選句をしたりして過ごしていた虚子は、先に述べたように異国の文化を学ぶ意志は殆どなかったと考えられるものの、船内での出来事や寄港地で目にする異国の文物に全く無関心で冷淡であったわけではない。むしろ、観光するとなれば事物を微細に観察し、「客観写生」という理念そのままに、見たまま体験したまを記録に残しているように思われる。日々の日記の記述には、自分の目で見たもの、人から聞いた話などが時系列で実に丁寧に書き綴られている。しかし、それに対して虚子がどのような感想を抱いたかという点については、『渡仏日記』の記述は雄弁ではない。淡々と「人生の旅」の一コマを過ごしながら、見たままあるがままだけを書き残していたのであろう。

そんな虚子が寄港地で感じ、考えたことがわかる箇所がある。「船が港湾に入るに従って支那人、馬來人、印度人、アラビア人、それぞれの生活の状態を見ることが出来たが、いづれも英国の勢力範囲若しくはその統治下にあつて、なほかつ各民族の生活を営んで居るといふ事は力強い感じを私に与へた」という。特に香港、シンガポール、ペナンの中国人の勢力は極めて大きいものであつたとし、「かれ等を統治する者が英国人であらうが誰であらうが、それらに^(ママ)頓著することなく、民族の肉をもって堅牢なる地盤を築きつゝあるのは心強いことである」と感想を述べている。そして「各民族がそれぞれに発展し、それぞれに蟠居して世界の国を形作つてゐるところに面白味がある。外国の文化に追随せんとしてもがくのもよいが、また、自己民族の文化を掲げて立つのもよい」とまとめている²³。ここには、船内での和服着用に関するスタンスと共通するものがあるように思われる。外国の文化を否定するわけではないが、自国の文化にもっと誇りを持って良いと考える虚子の姿勢には、一種の余裕すら感じられる。

そこから、虚子は今回の渡航の目的の1つであつた、海外で俳句をどのように詠むかという点に思い当たる。虚子は以下のように述べている。「船は領土の延長であつて、マルセーユに^(ママ)著き口

²¹ 『渡仏日記』、442～444頁。

²² 『渡仏日記』、40頁、449～450頁。

²³ 『渡仏日記』、463～465頁。

ンドンに著くのは其処まで日本の領土が延長することになるのであって、日本の本土と音信するのにも日本の料金で自由に無線電信をもって通信することが出来るのである。花鳥諷詠の詩をかれ等に説くことは、花鳥諷詠国の領土の延長といふことが出来る。」²⁴

これこそが、この船旅における虚子の姿勢を最も端的に表したものであろう。日本の船が日本から出航して、各寄港地に停泊していった場合、それは日本の領土の延長だというのである。当然、船内での生活も日本にいるときの生活と同様のものとなる。現地で中国人やマレー人がイギリスの支配を受けつつも自国の文化を保ちながら生活している様子を見ても、自分たちの文化を大切にするという点にのみ着目し、彼らの文化を学ぼうという発想はない。イギリス人に決して屈していない彼らを称賛しつつも、そういった彼らが暮らす土地に船でやって行くことを、日本の領土がその土地に広がって行くことだと考えるのは矛盾があるのではないか。ましてや彼らに「花鳥諷詠の詩」を教えようと考えているのは尚更である。虚子の旅の関心は結局、海外における「花鳥諷詠」、この1点であったのだろう。

なぜ虚子がこのような態度で過ごしていたのか、様々な解釈が可能であろうが、自らの「花鳥諷詠」の立場と西洋のキリスト教的人間至上主義の間に大きな隔りがあることを嗅ぎ取ったという可能性²⁵は大いにあるだろう。「花鳥諷詠」の立場では、春夏秋冬の移り変わりの中で起こる自然界の現象、及びそれに伴う人間界の現象を諷詠する。花や鳥は神が作ったアダムによって命名されたとするキリスト教的世界観とは相容れないと思ったのではないかというのである。

いずれにせよ、このような渡欧に対する態度が可能になったのは、まさしく日本郵船が1896(明治29)年、欧州航路を開設し、日本からヨーロッパへ日本の船で直行できるようになったからであろう。幕末・明治初期の渡欧者たちは、国家の期待を背負って渡航した使節団や留学生たちで、西洋の文物を少しでも多く学んで帰ろうという意気込みに溢れ、海外で見聞することにも驚きを隠さなかった。そこには、慣れない外国船で長い道中を過ごす緊張感も少なからずあったと思われる。しかし、日本郵船による欧州航路開設以後は、日本人船客は船中で多少なりともリラックスして過ごすことができるようになった。例えばフランス船やイギリス船で日本を出発したならば、各寄港地に入港するたびに「日本の領土が延長」したという感想はおそらく抱かないであろうし、そもそも、日本郵船でなければ、虚子のような人物はヨーロッパへ旅行しようなどと考えなかった可能性が高いだろうと思われる。

5. 横光利一の『欧洲紀行』

「延長」された「日本の領土」の中で1か月余りを過ごした虚子は、船上や寄港地で何度か句会を催している。横光もそこに参加し、3月3日、4日、9日には虚子の選に入ったことを書き記している²⁶。毎日の食事で同席し、シンガポールやカイロでは虚子と共に現地観光を行い、船

²⁴ 『渡仏日記』、465頁。

²⁵ 本井英「東と西の距離—虚子『渡仏日記』から—」(『有鄰』450、2005年)、4頁。

²⁶ 『欧洲紀行』、296頁、298頁、303頁。

内に自然発生的に生じた「虚子を頂点に置く日本人社会に自己を定着させた」²⁷ように見える横光であるが、しかし彼の旅行記は虚子とは全く味わいの異なるものであり、旅に対する姿勢も対照的なものであった。

既述のように、横光の旅の主な目的は、自己の心理の観察という個人的なものであった。それを反映して、彼の『欧洲紀行』では、虚子の『渡仏日記』のように船内の生活ぶりが微に入り細に入り逐一記録されてはいない。寄港地での観光については、多少詳しい記述はあるものの、虚子のそれに比べると、遥かに簡潔なものであり、見て回ったものを順番に詳細に述べることよりも、観光をしながら自分が感じたこと、考えたことについての記述が目立つ。

例えば、カイロへの1泊旅行について、虚子は1日目の3月21日に見聞したもの、2日目の22日に見聞したものと、それぞれ相当の頁数を割いて書き留めているのに対し²⁸、横光は3月21日にカイロ観光について述べてはいるが、どこで何を見たかということよりも、「(引用者注：カイロについて) いったい、砂ばかりの中に、どうしてこのやうな近代的な大都会が必要であり、維持されてゐるのか」「ピラミッドやスフィンクスや、博物館にある無数の古代の発掘物を見た。しかし、これには私は大して興味を思えない。ごろごろしてゐる豊富な遺物がどれもこれも五六千年前の物ばかりだ。こんな風になれば、われわれの知覚は通じなく、却って興ざめてしまふものだ」「これらの古代文明を眼前に目撃して、先づ感じる第一の事は、疑ひもなく、われわれの近代文化を支配してゐる根幹の知識とは全く別種の豊かな知識はここにあったといふ事だ」などと、横光自身が観光を通じて感じたことの記述が主になっている²⁹。そして、2日目の22日の日記は書かれていない。

3月6日のベナン観光に至っては、「ベナンの事は、あまり書く気が起こらない。好きな所といふものはこんなものだ。ここには問題もない。作者が自分の家庭内の出来事を小説に書くことは、罰のあたった事と同様である。もう夢幻のごとし。書くことほど馬鹿なことなし」³⁰と記しており、虚子とは全く異なる姿勢で旅の記録を残していたことがわかる。

そして、終日航海で終わった日の日記は、虚子は自分が1日どのように過ごしたかを相対的に簡潔にあっさり述べているだけなのに対し、横光の記述は長い。何をして過ごしたかということよりも、船中生活についての感想のような内容が主である。

「欧洲航路のマルセイユまで行く船中生活ほど、この世の楽土はまたとないと人人はよく口にする。なるほどさうかもしれない。しかし、何と退屈なことだらう。私は船客や船員達と殆ど友達になってしまったが、船の中には何か足りないものがある。私はいろいろ考へてみたが、それは孤独といふものだ。人間は限りなくも贅沢に出来てゐる。」(3月1日)³¹

「欧洲航路の船客といふものは、どこかの学校へ入学したやうなものだ。二度目の者を、われ

²⁷ 中川、前掲論文、125頁。

²⁸ 『渡仏日記』、109～128頁。

²⁹ 『欧洲紀行』、312～314頁。

³⁰ 『欧洲紀行』、300頁。

³¹ 『欧洲紀行』、294頁。

われの先輩と呼ぶ。老若貴賤の区別なく一年生は一年生の感動をもって、先輩の意見に耳を傾ける。ところが先輩諸君の訓戒は、何人も興味を感じるに相違ない話ばかりを選んでいく。一度、これらの話中に巻き込まれたが最後、その警戒はなくなってしまふ。夫婦の船客だけは自らノックアウトされていく。筆には書けぬ話といふものは、いかにこの世の中に豊富に存在してゐるか、計り知れぬものだ。」(3月2日)³²

「船客たちはそれぞれますます親しくなってしまった。科学者あり、軍人あり、領事あり、社長あり、重役あり、官吏あり、経済学者あり、裁判官あり、これら異なった職業の人物ばかりが、一家団欒して、階級を去り、年齢を忘れ、互に心事を語って生活する。このやうな美しく、利益ある生活をするには陸上ではおそらく不可能なことだらう。なるほど人生の樂園は歐洲航路の船上にあると云はれるのはこの事だと初めて気がついた。」(3月13日)³³

以上の箇所からは、船という閉鎖された小社会にすっかり横光が取り込まれ、それを特に嫌悪しているわけでもなく、それなりに楽しんでいる様子が窺える。

そして、この船内という閉鎖された小社会が、日本でのそれまでの生活から隔絶された、全く別の価値観や思考回路が支配するものであると、横光は感じている。2月26日の記述には、台湾沖で二・二六事件について伝え聞いたが、デッキゴルフをしていた若い船客たちが2分ほどの沈黙の後、何もなかったようにゴルフを続行したというくだりがある³⁴。横光はそれを見て「こんなものかと私は思ふ」とだけ感想を漏らしているが³⁵、2月28日の「内地にゐるとき面白いとか豪いとか思つてゐたものも船の進行につれ、だんだんつまらなく見えて来る。価値の変化は距離に比例するのであらうか」³⁶という記述は、二・二六事件に対する船客の反応をふまえてのものだと思われる。3月7日の「広田内閣の出現をきく。陸のことは陸のことだと思ふ気持ちだんだん強し。われら関せずと誰も思ふ」³⁷という記述は、さらにその心境を一步押し進めたものであろう。

この3月7日は、船が「魔の海」と呼ばれるベンガル湾に入った日であり、船から投身自殺をする者が多い場所だと聞いたこともあってか、横光は船に乗って旅をすることについて、あれこれと思案を巡らせている³⁸。

「洋上から押し襲つて来てゐる感覚は僅に持ち込んで来た荷物みたいな地上の理智といふものを、ときどき批判するものだ。ここでは理智が感覚を批判するのぢゃない。さかさまだ。こんな眼に毎日毎日出喰してをれば少しは気違ひぢみてくる。夫人をつれたり友達と来たりしては

³² 『歐洲紀行』、294～295頁。

³³ 『歐洲紀行』、306頁。

³⁴ 虚子は、事件の報を受けたのは2月27日としており(『渡仏日記』、24頁)、実際その通りであった。横光は香港到着前の日記は後から追想する形で書いており、おそらく日時を間違えているのだと考えられる。中川、前掲論文、124頁。

³⁵ 『歐洲紀行』、291頁。

³⁶ 『歐洲紀行』、292頁。

³⁷ 『歐洲紀行』、300頁。

³⁸ 『歐洲紀行』、300～302頁。

内地を引き摺って来てゐるみたいで、私のこの感情はわかるまいと思ふ。」

「家を出てみなければ家に関する批判は正当ぢやない。陸を放れてみなければ、陸上の批判は正当たるを得ない。かうなると海上の心理の批判は陸にゐるものの方が正当かもしれぬ。」

「私はふと、私が今まで考へてもみなかったことに頭が触れたが、人人の世界観といふものは、陸上の世界観ばかりだったといふことだ。しかも、人間闘争の原因は海陸いづれの心理から襲つて来てゐるものか誰も知らぬのだ。」

これらの言説は、虚子のような、日本の船で外国の港に入港することが日本の「領土の延長」であるという考え方の対極にある。虚子とは違って家族を連れず、全くの一人旅であったことも、このように寄港地観光をしていない時間に、旅の間の自分の心理について思いを巡らせる一因であったであろう。娘に同行され、俳句の弟子でもある機関長に伴われて普段と変わらない生活を送り、マルセイユでは留学中の息子に出迎えられる予定の虚子の旅は、「内地を引き摺って来てゐる」ように横光には映ったであろう。

横光にとって「旅行といふのは行く先の自然と人間とを比較すること」であった。だからこそ、「こんなに遠い紅海の真ん中で、突然、東京音頭や長唄のレコードを聴かされると、首を絞められたやうな気持になり、これは自分は刑罰を受けに誰かに流されたのだと気がつく。喜びなんかどこにもない」という感想も出てくる³⁹。「花鳥諷詠」を渡航先の人々に説こうという意図を持った虚子とは、旅の性格も、また旅日記の性格も大きく異なってくるのは無理もないことであった。

6. マルセイユ上陸

ポートサイドで再び乗船すると、あとはマルセイユで下船するまで地中海の航行である。ヨーロッパに憧れを抱いて渡航したわけではない虚子は、日記の記述も相変わらず淡々としたものである。船内から見たギリシャのクレイト島やイタリアのシチリア島、ストロンボリ島、サルディニア島、フランスのコルシカ島について、その様子を書き記してはいるが、上陸が近づいたことへの高揚感などは殆ど読み取れない。荷物の整理をしたという記述や、機関長上ノ畑楠窓に上陸後の旅の日程を相談したという記述などから、下船が近づいていることが窺える程度である。ただ、3月26日の朝、今まで殆どそういうことはしていなかったが、朝食後にラウンジに行って皆と話したという箇所⁴⁰からは、長く続いた船旅ももう終わりなので、最後ぐらいラウンジで皆と交流して過ごそうかという、船での生活に対するちょっとした名残惜しいような気持ちが読み取れるようにも思われる。

対する横光の方は、ヨーロッパが近づくにつれ、複雑な心境が心のうちで大きくなっていくのを全く隠していない。前述のように、不承不承パリに渡ることになった横光ではあるが、渡航す

³⁹ 『歐洲紀行』、310頁。

⁴⁰ 『渡仏日記』、134頁。

となった以上、初めて見るヨーロッパの地に対して相当の期待を抱いていたと考えられる。渡欧するのに、アメリカ経由で行くか、欧州航路を利用するか、シベリア鉄道で行くか迷ったが、欧州航路で出発してみて、それで良かったと気付いたと述べている横光であるが、それは「印度洋を廻れば未開の地から漸次にヨーロッパの文化の頂上へ行くのである。つまり彼らの長い歴史を通して現代へ現れるやうなものだ。これに増した豊富な実験は先づこの世ではあるまい」という理由からであった⁴¹。アジア各地に対する「未開の地」という認識の是非はともかくとして、ヨーロッパを「文化の頂上」であるにとらえ、到着したらさぞかし興奮や感動を覚えるだろうと思っていたことが窺える。

しかし、3月24日の日記から少々雲行きが怪しくなる。「地中海に這入れば定めし一種の興奮を感じるのだらうと思つてゐた。ところが、別に何らの感動も起つて来ない」というのである。その前に観光したエジプトの印象が強かったようで、「紅海の前にマルセイユでも見え出してくれたなら、私はどんなに喜びを感じたことだらう」と述べている。更に横光は、「地中海へ這入つて来ると、旅客の心理はいかに隠しても複雑になって来る。(中略) われわれの心底の中には、「ふん、何が地中海だ。」という肚が、不意に出始めて来るのである」とまで言う⁴²。日本を代表する知識人として西洋文明と拮抗・対峙しようという意識があったとはいえ⁴³、あまりにも肩肘を張つて身構えているように思われる。西洋へのコンプレックスと愛国的心情が混在した、複雑な心理であるといえるだろう。

マルセイユに到着した際の反応も対照的である。

虚子の方は、息子の友次郎が出迎えに出ており、さしたる緊張感もなくゆったりと構えて下船した。いつもの通り、見聞したものについては観察も細かく記しているが、目的地に到着したという感動や興奮は殆ど感じられない。到着後、友次郎、章子、楠窓と4人でマルセイユ市街をドライブしているが、ここで虚子が抱いた感想は特徴的である。「しばらく漁師町を通つた。日本の漁師町と似通つた感じもあつたが併し大分綺麗であつた」「物静かな、大きな、いゝ町だと思はれた」⁴⁴といった記述は、マルセイユに関して多くの人が抱く印象とはかなり異なる。与謝野寛や島崎藤村、河東碧梧桐など、マルセイユで上陸してヨーロッパ各地へと向かつていった日本人たちは、マルセイユの町の第一印象について、殺風景で汚く、頹廃していると書き記していることが多いからである⁴⁵。決して虚子が汚い部分を見ていなかったわけではないだろう。「道ばたにぼんやり佇んで居る人が多いのは生活の目的のないならず者が多いのかとも思はれた」^(ママ)全体が落著いて物静かであるが活気が無く新鮮なものが無いやうで、どこことなく老大国といった感じがするの

⁴¹ 『欧洲紀行』、300頁。

⁴² 『欧洲紀行』、314～315頁。

⁴³ 滝澤壽『近代日本人のフランス かの国にたどる芸術家十人の生の軌跡』(駿河台出版社、2007年)、47～48頁。

⁴⁴ 『渡仏日記』、139～140頁。

⁴⁵ 拙稿「近代日本人の見たマルセイユ——「初めて踏む欧羅巴の土」に抱いた印象——」参照。

であった」⁴⁶といった記述からは、きちんと見るべきものは見て、感じるべきところは感じていると思われる。マルセイユは1869年のスエズ運河の開通以後、港町として著しい発展を遂げ、ナポレオン3世によって町並み改造の大工事も行われ、大いに町は活性化した。その結果、移民が流入し治安が悪化、そのような最中に世界恐慌が起こり、外国人反対運動も起こっていた。虚子は、そのような町の雰囲気を感じ取っていたように思う。ただ、ヨーロッパに対する期待も関心も殆どないため、どこか他人事のように「綺麗」「いゝ町」という気楽な感想が出てきたのではないだろうか。

また、虚子たちは町の中をドライブする中、マルセイユ観光の定番スポットを訪れたという記述が全くない。虚子のそれまでの旅行記のスタイルからすると、マルセイユを訪れる者の大半が見学すると思われるノートル・ダム・ド・ラ・ガルド寺院など、訪れれば必ず記録を残すと思われるが、全くそのような記述がない。「巖窟王のゐた嶋と云ふのが港近くに見えてゐた」⁴⁷というのが唯一の観光地に関する記述であるが、イフ島という名前すら出さずに書かれている。虚子の無関心ぶりが窺える。

かたや横光のマルセイユ上陸後の感想は激烈である。まず下船時に、税関で最年長の乗客だけが荷物を「見るも無残に」引っ掻き回され、「見たところ、あなたはここで一番年上だから、みなに代わってあなたの荷物を嚴重に検べたが、悪く思はないで貰ひたい。(中略)どうかあなた一人あきらめて税金を払っていただきたい」と言われ、横光含め後続の船客たちは殆ど何も見られなかったというエピソードを、「フランス人の最初の自由さをわれわれは見たのである」と皮肉たっぷりに紹介している。その後、マルセイユの町の中を回った際の感想は、「不思議なことに、マルセイユの群衆は誰一人笑つてゐるものがない」「いっぱい群衆がぞろぞろ街に溢れてゐるのだが、疲れて、青ざめて、沈み込んで、むっとりしてゐるものばかりだ。そこへ夕陽があたつてゐる。これがヨーロッパか。——これは想像したより、はるかに地獄だ。本国を捻じ倒してゐる植民地の勃興は現代の一大事実になつてゐるのだ」というものであった⁴⁸。

東南アジアやインドなど、植民地支配を受けるアジア各地を通過してヨーロッパへ到達することが、「未開の地」から「文化の頂上」への道のりであると思つてきた横光であるから、ヨーロッパに第一歩を刻んだ町の「活気が無く新鮮なものが無い」という様相は衝撃的であつたのであろう。それを「どことなく老大国といった感じがする」で片付けられなかつたのは、横光のそれまでの西洋に対する憧れとコンプレックスの混じつた複雑な感情ゆえであつた。

また、横光もノートル・ダム・ド・ラ・ガルド寺院やイフ島といった名所の記述を一切残していない。しかし、このときの滞欧体験がもととなつた小説『旅愁』では、主人公の矢代がノートル・ダム・ド・ラ・ガルド寺院を訪れる場面があり、寺院の詳細な描写がなされているので、横光自身、おそらくこのとき寺院を訪れていると思われる。これまでの横光の旅行記では、虚子に

⁴⁶ 『渡仏日記』、139～141頁。

⁴⁷ 『渡仏日記』、137頁。

⁴⁸ 『歐洲紀行』、316頁。

比べれば観光地の記述は詳細ではないにせよ、訪れた場所を全く記載しないということはなかった。ヨーロッパに初めて上陸し、予想と全く異なる現地の様子に横光の心理が大きく推移し、また今後のヨーロッパ滞在についても思いやられ、船上生活中の寄港地での旅日記と同じようなものは書けなくなってしまったのであろう。

このように、同じ旅程を旅しながら、一見全く異なる旅行記を残した2人の文学者だが、しかしこの2冊の旅の記録には共通する時代背景が浮かび上がる。

日清・日露戦争や産業革命を経て、日本は欧米に並ぶ高度な科学技術を発展させ、渡航者たちは従順で勤勉な学習者の視線を徐々に持たなくなっていた。そして、日露戦争以降、日本国内では知識人や富裕層の間ではあったが観光旅行がブームとなり、戦勝国意識を持った日本人たちが気楽な漫遊として海外を旅する事例が増えていった⁴⁹。これにはもちろん、日本郵船の航路延長により、日本人スタッフと日本語で会話ができるようになったことが大きく寄与している。第1次世界大戦後には、作家の旅行記も多数出版されるようになった。日本郵船の船内には、各寄港地の見どころやホテルの案内などを記載した「渡航案内」が常備され、大いに現地観光の手助けとなった。

このような状況であったから、虚子のように外国に殆ど関心のない、異国の文化を学ぼうという意志も殆どない人物でも海外旅行が可能であったし、横光のように自己の心理の観察に的を絞った旅もまた可能となった。寄港地についても、旅行記や船内の案内など、あらかじめ情報が容易に入るようになっていたため、現地を訪れても既に知っていた通りで、虚子のように特に感想を記すこともなかったり、横光のように逐一訪れた場所を詳細に書きとめるのではなく、その地で自分が考えたことを書き残すのが主体になったということもあるかもしれない。

そのような意味で、2人の旅行記は、それぞれ違った形ではあるが、幕末・維新期の渡航者たちのものとは大きく一線を画している。しかし、第2次世界大戦を経て、日本人の観光旅行は新たな局面を迎えることになる。敗戦や冷戦を経て、日本を取り巻く国際関係は大きく変化し、日本人にとっての「世界地図」は大きく変わった。そして飛行機による海外旅行が船旅に取って代わった。『渡仏日記』も『歐洲紀行』も、日本人が自国の船でヨーロッパへ旅行に出かけていた、20世紀前半という時代を反映した旅行記であるといえるだろう。

⁴⁹ この点については、有山輝雄『海外観光旅行の誕生』（吉川弘文館、2002年）が詳しい。